ナパン
「かまどのめし」
三稿02

20240524

エリー

目次

1、ナパン 1
2、カエデ誕生 3
3、連想 6
4、関係ある？ 9
5、ひとりで挑戦！ 13
6、本音 16
7、ハガネ 20
8、科学の力 23
9、再戦 25
10、工場の給食 27
11、鍋のご飯 29
12、記録をつける 31
13、ユウギリ 34
14、息子の好み 37
15、オモト 39
16、ノート 41
17、初盆 42
18、レシピ 44
19、めしの味 46
20、ヒナギク 48

1、ナパン

ここはナパン。なんちゃってジャパン。

2030 年の日本の科学力と文化を持つちょっと違う世界。

違うところはどこか？

最大の特徴は、AI の台頭で職を失った人々を、ローサイクルと名付けて、国土保護の義務を課したところ。
そして持続可能な里山の資源を利用する共同体を作る。支え合うことが福祉であり、セーフティネット。
稼ぎまくる人々はハイサイクルとして自由を金で買う。集まった金は、ローサイクルの支援に使われる。
つまり、能力で住み分けている。

仕事に就けない人に役割を与えて、加護することで、子孫を残す仕組み。

ローサイクルの村は、出産、育児、介護、看護を引き受ける。家庭機能を担う。

対してハイサイクルは仕事機能を担う。

そしてジャパンとの決定的な違いは、学校教育をやめたこと。教えるのをやめて、自主性を尊重する。

なぜって？

大金かけて学校に通わせても、ほとんどの人は職に就けず、支援されて暮らすだけだから。
それなら初めから村の運営と家庭運営を実践で身につけて、丁寧に暮らす方がいい。やらないことは忘れる。

娯楽としての勉強はある。やりたい人はスマホを通じて学べる。

オンライン講座は大人気！

勝手に学んでどんどん取り組む人を育てることで、都会で起業させる。

ナパンはそんな世界。

いろいろ言ったけど、「スマホはあるけど、田舎ではかまどのめしを食う」くらいに覚えて。
ナパン 2030 年、春から話は始まる。

2、カエデ誕生

村の多くは山奥に点在する。

山間の平地に、小さな一軒家が、扇状に 50 軒並んでいる。間取りは 3LDK の平屋。

要のところにセンターと呼ばれる大きな建物がある。道の駅の役割を果たす。

カエデの村も同じ作りをしている。

家は大人１人に１軒貸し出される。

１２歳までの子どもも一緒に住める。

しかし大人同士は住めない。

センターの給食室で朝昼晩とご飯を食べる。決められた時間内に行けばよい。

他にも決まりはある。

１３歳から１５歳の子どもが、工場で作った制服を着る。

普通の人は白い服。

決め事をする村長は赤い服。

相談できる占い師は紫の服。

占い師がいるのは、タロットや西洋占星術の価値観が共有されているから。円環思想を採用している。前世、今生、来世があると考える。
死んだら終わりではない。逃げることはできない。だから生きてる間に課題を 1 つでも克服することを目指す。

2030 年 05 月 19 日、午後 10 時 25 分、カエデは生まれた。

牡牛座の 4 ハウスで、太陽、土星、火星が重なる。

太陽が牡牛座は五感を育てることが人生の課題。

土星はとても時間がかかることを意味する。

火星は試練や困難に耐えることを意味する。

4 ハウスは、居場所で問われることになる。

占い師ユウギリはカエデについて「なかなかできなくても、気長に応援するように」と村人たちにアドバイスした。
同級生のポトスに、娘のカエデを見守るように託されたヘチマとキウイは驚いた。
両親とも優秀だから、娘のカエデも有能だと思い込んでいた。

ヘチマは思わず口に出す。

「つまり、どんくさい？」

親しみを感じたキウイも思わず言う。

「俺らと同じ？」

　二人は同時に叫んだ。

「ポトスの代わりに俺らが守る！」

　ユウギリに二人が親指をたてて見せる。

　「任せる」

　うなずいたユウギリは、ヘチマとキウイの成長ぶりを喜んだ。

3、連想

１３歳になる子どもは、３月半ばに町の工場へ去る。

代わりに７歳になる子どもが、手伝いに参加する。お金はまだもらえない。

給食係を選んだカエデは、調理場に入ることが許される。

初めての見学なので、オモトだけでなく、心配してヘチマとキウイも来ていた。

その日は、昼ごはんの準備のため、カエデの母オモトはほうれん草を茹でる支度をしていた。
お椀の底に沈めて、味噌汁を注ぐのだ。

大きな鍋に水を張り、薪で沸かす。

オモトはカエデに見張りを頼んだ。

「鍋の底から小さい泡が出たら呼んでね」

「うん！」

ほうれん草を洗うため、オモトが水場に行く。

離れた場所で、ヘチマとキウイが話している。

　カエデが鍋の水を眺めていても、変化はない。

　楽しいから鍋は見ているが、何のために見ているのか、カエデは忘れてしまう。

　鍋の底に小さな泡が見えた時、年上の子どもたちがお小遣いで買ったシャボン玉のようだと思う。
　ぱちん。

　泡が浮かんで、水面で弾ける。

　シャボン玉が弾けて、せっけん水が目に入ったことを思い出す。

　すごく痛くて、カエデは泣いた。

　オモトに水場に連れていかれて、目を洗った時のことを思い出す。

　そして連想が始まる。

(せっけんといえば、洗うもの)

(洗うと言えば、ユウギリさんはいい匂いのするシャンプーをお小遣いで買っているという)
(シャンプーを買うのもいいなぁ)

(でもマドレーヌもいいし)

　カエデの頭にほしいものが次々浮かんでくる。

　もう鍋は全く見てなかった。

「カエデ、鍋！」

「は！」

　グラグラ沸き立ち、もうもうと湯気が上がっている。

　オモトだけでなく、ヘチマとキウイも近くに来る。

　ヘチマが心配そうに言う。

「やっぱりカエデちゃんに７歳からは無理だ」

(マドレーヌが遠ざかる〜)

　カエデは焦る。

「俺らが村と話をつけてきますよ」

　キウイが賛成する。

(ピンチ！)

「大丈夫。通常、付き添いは一週間だけど、一年しようと思うの。お小遣いは半額になるけど、１年待つよりいいでしょ？」
(いい。すごくいい！)

「うん！」

　カエデはオモトに抱きついた。

　優しい手が、頭をなでてくれた。

4、関係ある？

　かまどで飯を炊くことは、総合力が問われる。だから、すべての子どもが一度は経験する。
　うまくできれば、将来を期待される。

　初めての日、２升炊ける大きな羽釜を運ぶことから始まる。

　体が丈夫で、力持ちなので、カエデには楽勝。

　満足そうにオモトが微笑む。

　オモトは問いかける。

「米の計り方は知っているね？」

　カエデは自信を持って答える。

「うん！」

　１升枡に米をすくい、山盛りのまま入れようとする。

　オモトが慌てて止める。

「待って。平ら！」

「あ！」

(やっちゃった)

　気持ちを切りかえて、小さな手ですりきれ１杯にする。

　そしてもう１杯入れる。

「今日は入れ方を覚えたね。あとはわたしがやって見せるからみていて」

　オモトが羽釜を受け取り、米をとぐ。

　水が注がれ、かまどに羽釜が据えられる。

　ワラに火がつく。

(いつ見てもワクワクする。母のご飯は美味しい。炊けるのが楽しみ)

「水がぶくぶくになるまでちょっと強めにするの。音が変わるから聞いていて」

　耳に手を当て、カエデは音を聞く。

(水が怒ってる。ジリジリ言ってる。お尻に火をつけられてるもんね。熱いよね。わたしなら怒っちゃうよ)
「今の音、聞いた？」

「え！？」

　手際よくオモトが火を落とす。

「全然分からなかった」

「火を使ってる時によそ事考えてちゃだめよ」

　カエデは首をかしげる。

「よそ事ってなに？」

「今はご飯を炊いてる。火と水の様子以外のことよ」

　カエデは違い分からず悩む。

「水が怒ってた」

「それは水のことだけど、ご飯を炊くことには関係がないよね？」

「あるような、ないような.....」

「ないよ」

　考え込むカエデ。

　炊いてるところを見ずに、どうして関係がないのか、頭のなかで問い続けている。

(水の話なのに怒っていることは関係なくて、なにが関係あるんだろう)

(ご飯を炊くのに必ず火はつける)

(そしたらぜったい水が怒る。なのに関係がない？)

「カエデ、ちゃんと見てないとだめよ」

(関係あるってどういう意味だろう)

「炊けたわ」

「え、もう？」

　ふたを開けようとするカエデ。

「ダメ！」

　母がカエデの手を押さえる。

「どうして？」

「蒸らさないとだめなの」

　椅子に座ったオモトが、カエデを手招きする。オモトの膝の上に乗る。

「都会では電気釜で炊くの。不味くはないけど、最高じゃない。かまどで炊くのは大変。

でも最高の味になる。わたしのご飯の味を覚えてね」
「うん！」

　オモトに抱き締められ、カエデは希望に燃える。

5、ひとりで挑戦！

　カエデが初めてひとりでご飯を炊く日がきた。

　目覚ましでひとりで起きる。

　オモトのベッドは空っぽ。早朝に散歩をする習慣なのだ。

　カエデを信じて、いつも通りにオモトが行動する。

　カエデは信頼されていることが嬉しかった。

　給食室の前で、ヘチマとキウイが、体操をしている。

　カエデを心配して見に来たことがバレバレ。

(気づかいは嬉しいが、もっとわたしを信じてほしい)

　ヘチマとキウイが、同時に声をかけてくる。

「おはよう！」

　カエデは少しでも安心させたくて元気よく返した。

「おはよう！」

　ヘチマがズバリ言う。

「今日から一人で炊くんだろ。困ったら俺たちをすぐ呼びな」

　自信があるカエデはニッコリする。

「ありがとう。でも大丈夫。１年も習ったもの！」

　キウイはただ応援してくれた。

「頑張って！」

　手を振り、建物に飛び込んだ。

　羽釜を机に運ぶ。

　２升の米をちゃんとすりきれで入れる。

　水で米を磨ぐ。

　受けるざるにかなりこぼす。

「あ、やっちゃった！」

　ざるから羽釜に戻す。

「明日は、こぼさないぞ！」

　かまどに羽釜を据える。

　ワラに火をつける。

　水が沸く音に耳を傾ける。

(だんだん音が大きくなってきた。もういいかな。まだかな。分かんないや)

　カエデは強火のまま炊き続ける。

村の人たちが給食室でご飯がくるのをまっていた。

カエデは羽釜を運ぶ。

ふたを開けると米は真っ黒。

１つ年下の科学好きの少年ハガネが叫んだ。

「朝飯ぬきかよ！」

慌ててヘチマとキウイがハガネの口をふさぐ。

カエデは泣くのを我慢した。

調理場に戻り、焦げた羽釜をひとりで洗う。

後始末は自分でするルール。

「お母さんのように上手になるぞ」

涙をぬぐって顔をあげる。

6、本音

(ふー)

　カエデは今朝も飯炊きに失敗してしまう。

(焦がすよりよいと早めに火を落とすと芯が残る)

(長く炊いても焦げないように、水を増やすとべちゃべちゃになる)

(もうどうしていいか、分からないよ)

　気分転換に河原に散歩に出掛ける。

　ヘチマとキウイが釣りをしている。

　カエデはびっくりさせようとそっと近づいた。

　すると二人がカエデのことを話していた。

　ヘチマがため息をつきながら言う。

「ドキドキハラハラのカエデ飯は１０日に１回かぁ.....」

　淡々とキウイさんが返す。

「米炊き当番は３０人はいるからなぁ」

　カエデは逃げ出そうとしてスッ転ぶ。

　二人が同時に振り向く。

　カエデの頬から涙が落ちる。

　ヘチマがしまったという顔で言う。

「カエデちゃん！？」

　キウイがカエデを気づかう。

「悪い意味じゃないんだ」

(悪い意味だよ！)

　人に会っても黙ったまま、カエデは家まで駆け抜けた。

　家に着くと甘い匂いがした。

(母が隠れて何か食べているのだろ。１２歳までの子どもに買い与えないルールなのだ。子どもが小遣いを稼ぐ理由を作るためという)
(わたしも半額だけど報酬をもらってるから、買おうとおもえばお菓子を買える。でも失敗ばかりなのに買えないよ！)
　心を落ち着けて、カエデは静かに言う。

「入っていい？」

「５分待って！」

　カエデは止まらない涙を必死でぬぐった。

　びちゃびちゃになる手の感触が、粥になった飯を連想させて、悲しみが爆発した！
「わたし、米炊きやめたい」

　言い終わるとおいおい声を上げて泣き出す。

　玄関が開き、オモトが慌てて出てくる。

「どうしたの？」

(うっ。うっ)

　言葉にならないカエデの背中をさすり、オモトが家の中に連れ込む。

「河原でヘチマさんとキウイさんが釣りしてて、近づいたら、ドキドキハラハラのカエデ飯って言ってたの！」
　オモトがカエデの頭をなでる。

「失敗しても食べてくれるのに期待にこたえないでどうする！」

(まさか叱られるとは！)

(なぐさめてくれないの？)

(やめていいっていわないの！？)

　びっくりしてカエデは思わず言い返す。

「だってわたしが食べても不味いもん。みんな嫌だよね」

　ぎゅっと抱き締められる。

「カエデならできる。お母ちゃんが死ぬ前にうまいめしをたべさせておくれ」

　カエデは首をかしげる。

「カエデがおばあちゃんになってもいいの？」

「いいよ。長生きして待つから」

　カエデはうなずき、涙をぬぐ。

「顔を洗ってらっしゃい」

「うん」

　流しで顔を洗っているとチャイムが鳴る。

　オモトが玄関をそっと開ける。

「ヘチマとキウイが魚焼いて食べようって来てるけどどうする？」

「いく！」

　顔をふき、玄関に向かう。

　息ぴったりに同時に言う。

「傷つけてごめんな」

「本当のことだからいいの。泣いてごめんね」

　ヘチマとキウイの真ん中に挟まれ、手をつないで歩き出す。

　後ろからオモトもついて行く。

7、ハガネ

　季節は真夏になっていた。

　つまり、４ヶ月まずい飯を食べさせ続けている。

　窓の外で咲き誇るヒマワリが、カエデは憎らしく思えた。

　給食室に羽釜を運び、村人の前で顔を上げるのが恥ずかしいからだ。

　特にハガネの顔を見るのは辛い。毎回あからさまに怒っているから。

　ふたを開けるとご飯がべちゃべちゃ。

　とうとうハガネが言い出した！

「俺、食べない。カエデのごはんはすごくまずい。もう米を炊かないでほしい。代わりに俺が炊く」
　ヘチマとキウイがハガネの口をふさぐ。

　ヘチマが怒る。

「頑張ってるカエデになんてこという」

　つかさずキウイが突っ込む。

「お前も泣かせたじゃん！」

　ばつが悪そうに、ヘチマが頭をかく。

　指導的な立場にあるユウギリが判断を下す。

「成長を信じて見守らないのは悪いことだ。ハガネは村から出ていきなさい」

　カエデはハガネをかばった。

「本当のことだからいいのよ。叱らないで」

　振り返り、カエデはハガネの目を見る。

「わたしには、うまい飯を炊くという夢があるの。やめない。だから教えて」

　ふん。ハガネが鼻を鳴らす。

「教えをこうなら、俺に頭を下げられるのか？」

　カエデは心を込めて深々と頭を下げた。

「よろしくお願いします」

　照れ臭そうに鼻をいじるハガネが答える。

「いいだろう。明日の朝は俺の当番だから来い」

「はい！」

　ユウギリが、ヘチマとキウイを見てうなずく。

　キウイが雰囲気を変えようとしてくれる。

「さあ、たべようぜ！」

　ヘチマが引き戻す。

「これが最後の失敗かも知れないから、味わおうぜ！」

キウイがヘチマの頭をポカンとはたく。

ヘチマが気まずそうにカエデを見る。

カエデは口に手を当てて思わず笑う。

(そうなるとよいのだけど)

8、科学の力

　翌朝、カエデはいつもより早く調理場に向かった。

(せめて、道具は準備しておきたい)

　羽釜、枡、米を用意する。

　昨日は憎らしく思えたヒマワリが、１本だけ心配そうにうつむいている。

(きっとこの子もどんくさいのね。応援してね)

　しおれかけたひまわりに祈りを捧げる。

　カエデが顔をあげると、いつのまにかハガネがいた。

「イマドキ祈る？　　科学的じゃないな！」

(そうだけど.....)

　カエデの戸惑いを無視して、ハガネが続ける。

「大事なのは数字！」

　カエデはきょとんとする。

「米だけじゃない。水も、ワラも、加熱する時間も、全部はかる！」

　できそうな方法に、思わずカエデは返事をする！

「はい！」

　カエデは、タイマーや計りや計量カップを出してくる。

「俺が言う数字をメモれ」

「はい！」

　ポケットからスマホを取り出し、メモアプリを開く。

(感覚に頼らない方法があるなんて！)

　ハガネを尊敬の眼差しで見つめる。

9、再戦

　カエデに次の当番が回ってきた。

(ふう。米も水もワラもはかった。加熱時間もタイマーしてる。失敗はないはず)

　窓の外を見る。

　灰色の雲が流れていく。

(雨が降るのかしら？)

　かまどから離れて窓に近づく。

　窓ガラスに雨つぶが打ち付ける。

　ピカッと光る。

　ゴロゴロ。

「きゃっ」

　タイマーがピピピピとなる。

　羽釜から蒸気が出てる。

「は！」

　急いで火を小さくする。

「ふー。焦げてないよね？」

　またタイマーをセットする。

　みんなが待っている給食室に羽釜を運んだ。

(ハガネ、ヘチマさんとキウイさん、ユウギリさん、母のオモト、みんないる)

(すごく注目されてる！)

　ふたを開ける。

　つやつや。

　最初にハガネが口を開いた。

「俺の指示がいいからな！」

　カエデは素直に答えた。

「うん。ありがとう！」

　みんな笑顔になる。

10、工場の給食

１３歳から１５歳までの３年間、寮生活をして、工場で働く義務がある。

第一に、共同体の一員にふさわしいか、判断するため。

第二に、村で使うものを生産するため。

第三に、好きな係を選んで、技術を覚えるため。

最初の３ヶ月は、交代でラインにつく。

その後、希望の係を選ぶ。

カエデは工場の給食係についた。

手仕事の村と違って、工場ではカットも加熱も機械任せ。ほぼ全自動。

人間は、機械の掃除が仕事。

(五感を鍛えるために、だから村ではかまどで炊かせているのね)

納得すると同時に、電気釜の味に驚く。

(まずくはないけど、わたしが炊いたかまどのご飯の方がおいしい気がする。なぜだろう？)

11、鍋のご飯

　カエデは、母のめしが大好きなので、味を引き継いで、母が引退しても食べられるようにしたい。
(町には残らず、村に帰ろう)

　卒寮したら一人前と認められるため、誰も決定に口出しできない。

　卒寮すると 30 万もらえる。

　経済活動を活性化される仕組みとして、村のお金は 30 万以上になると消える。

　そして村に戻って仕事に就けば、月に 10 万もらえる。

　だから 15 万くらい町で使ってから村に帰る人が多い。

　カエデは父ポトスの家に泊めてもらう。

　そして鍋でご飯を炊く練習をする。

　まずスマホで検索したレシピどおり炊く。

　次に五感を頼りに炊く。昔のような大失敗はしない。

　違いを教えずに、ポトスに食べ比べてもらう。

ポトスはレシピの方がおいしいという。

カエデが食べてもレシピの方がおいしい。

(村で五感を試すのは、自信がついてからにしよう)

そう決意して、村に帰った。

12、記録をつける

カエデは 17 歳の夏を向かえようとしている。

お盆の季節。

町の人々が村に里帰りする。

大人になったカエデは、一軒家が与えられている。

台所に座り、窓の外の入道雲を眺めていた。

玄関チャイムが鳴る。

扉を開ける。

ハガネが立っている。卒寮して街で働いているという。

「お盆だから帰ってきたの？」

後ろからハガネが紙袋を出す。

「これ、やるよ」

中を覗くと「焼菓子」と書いてある。

「嬉しいけど、どうして？」

ハガネが辺りをうかがい、玄関に入ってきて扉をしめる。

　カエデは急に緊張する。

「村のために戦うなら、守る人数は多い方がいい。俺の子どもを産んでくれ」

「いきなり子ども？」

　うんうんとうなずくハガネ。

「今すぐでなくてもいい。カエデがよいと思ったらでいい。ダメか？」

　無言で焼き菓子の包みを開ける。

　マドレーヌを一口食べる。

「こんなに美味しいものくれるならいいかな」

「よし！」

　ガッツポーズするハガネ。

(お父さんもちがう店の焼菓子送ってくれる。倍も食べられるなんて幸せ)

(それにハガネのことはちょっとだけ好きだから、プロポーズされて嬉しい)

　そのまま台所で話し込む。

　カエデは思いきって聞いた。

「お母さんのめしの味を受け継ぐにはどうしたらいい？」

　ハガネは答えた。

「温度や湿度を一定にして、1 つずつ要素を調べるのが本来だが、そんな設備は村にはない」
(やっぱり無理なのか)

落ち込みかけたカエデに、ドヤ顔のハガネが指示する。

「米、水、ワラ、時間ははかっているから一定だ。温度や湿度の影響で誤差が出るのだろう。記録をつけろ。味や見た目、食感の感想もメモするんだ。なにか、わかるかもしれん」

パーっとカエデの顔が明るくなる。

「そんなに期待するな。科学は万能じゃない。でもやる価値はある。俺の仕事はそういう地道な作業なんだ」

素直なカエデはその日から記録し続けた。

13、ユウギリ

小さな村では、人が死ぬ度に葬儀をあげることはできない。

だから８月に合同で弔う。

お骨は共同墓地に納められ、めしと味噌汁を備えて、葬儀歌手のリードで、みんなで歌う。思い出にひたる。
死者たちは、村の守り神となって見守っていると村人たちは信じている。

米を炊くのは、初盆の関係者から選ばれることが多い。

ユウギリが亡くなった時は、ヘチマとキウイが炊いた。

葬儀が終わるまで誰も口にできない。

歌い終わると村の給食室で、捧げためしと味噌汁をみんなで分けて食べる。

食べながらヘチマとキウイが思い出をカエデに話す。

ヘチマが切り出す。

「劣等感に打ちのめされてた俺らを、ユウギリさんは救ってくれた」

キウイがうなずく。

「同級生のポトスは都会で起業して、貿易会社を大きくした」

　初めて聞く話にカエデはドキドキする。

　キウイが懐かしそうに続ける。

「ポトスは子どもの頃から賢くて、俺らのリーダー。都会で暮らしていても、村のことを忘れずに、みんなに贈り物をしてくれる」
　うなずき応じるヘチマを、カエデがじっと見る。

「なのに俺らは、小さい頃からどんくさい。町に出てもすぐにバイトをクビになった」
(わたしは最初から挑戦しなかった。クビになってもやっただけ偉いと思う。でも言える雰囲気じゃない)
　カエデが言おうか迷っていると、キウイが合いの手を入れる。

「村の仕事がだめでも、町にいけばなんとかなると思っていた。村に帰ったあとで、へこみまくったよ」
　ヘチマが被せる。

「そんな俺らに、ユウギリさんが言ったんだ。なにもできない人がほとんどなんだから、それでも楽しく暮らしてたら、同じようにできない子どもが安心するだろ。ヘチマやキウイでも生きてるから大丈夫と思えるだろ。ダメはだめなりに役に立つ」
　驚いた顔のカエデを見て、二人は爆笑する。

　ヘチマが言う。

「ユウギリさんは衝撃を受けてる俺らに構わず続けた。だってわたしは占いができる。何も持たない者じゃない。同じじゃないって思うだろ？」
　笑いながらキウイさんが話す。

「ひどい言われようだが、その通りだった。内心、そんなことないと否定してくれるのを期待していた俺らは、目が覚めたよ」
(確かにそうだ。できない人が楽しそうでないと意味がない。だってできる人はできてるもん！)
　納得した顔のカエデにヘチマがしみじみと話す。

「きれいごとではなく、本音で接してくれて、俺たちは救われたんだ」

　カエデは、何度もうなずいた。

(自分もだめだったけど、ハガネに助けてもらって普通にはなれた)

(誰でも真似できるレシピで、できない子を救えている。役に立てているんだろうか)
(もしお母さんの味をレシピにできたら、めしのなかでお母さんは永遠に生き続けるのに)

14、息子の好み

　カエデとハガネは、３人の息子に恵まれた。長男はマツ、次男はタケ、三男はウメ。
　３人とも父親に似て、頭が良かった。

(たぶん、町に出ていってしまうのだろう)

　一緒にいられる１２歳までの時間を、カエデは大切にした。

　ある日、長男マツがカエデに言った。

「僕はおばあちゃんのご飯の味が好きだけど、お母さんのご飯もすき。だって僕のおかあさんだから」
　カエデは驚いた。

「ありがとう」

(自分のご飯を好きだと思ってくれる息子がいるなら、無理して母の味を受け継がなくてもよいのかもしれない)
　でも記録はやめなかった。

　息子たちは去ったが、３９歳になったハガネが村に帰って来た。

　４０歳までに戻らないと村に帰れなくなるからだ。

　４０歳から６０歳まで村人の世話した隠居しか、村人から世話されない。

15、オモト

　カエデは５０歳の春を迎えた。

　母オモトたちのために山の斜面で山菜を摘む。

　突然、遠くからヘチマの声がする。

「カエデさーん、すぐ帰って！」

　カエデはすぐに立ち上がった。

　山菜が散らばる。

「どうしたの？」

　息を切らせてヘチマが来る。

「はあ、はあ。オモトさんが。はあ、はあ。倒れた」

　迷わず走り出す。

　オモトはヘリコプターで運ばれるところだった。

　町でしかできない手術が必要らしい。

　ヘリに乗り込み、オモトの手を取る。

「死なないで、まだうまい飯を食べさせてない！」

　弱々しい手をオモトが伸ばす。

「普通でいいのよ。普通で十分」

　ヘリの扉が閉まる。

　取り残されたカエデは、ぼうぜんとする。

　夜になり、「オモトさんは亡くなりました」とスマホに知らせが来る。

　テーブルにうつ伏せ、カエデは泣きじゃくった。

「お母さんが死んじゃった。お母さんの味を食べさせる前に死んじゃった。記録してもなにも分からなかった。全ては無駄だった」
　緊張の糸が切れたカエデは、米が炊けなくなった。

(最期に話せたのが奇跡だったという)

(あんなに信じて期待してくれたのに、普通でいいの？)

(もう頑張らなくてていいの？)

(なんのために 40 年以上も米を炊いてきたの？)

　答えは出ない。

16、ノート

　めしが炊けなくなったカエデの代わりを、引退したヘチマとキウイがした。

　泣くだけ泣いて落ち着いたカエデは、ノートを燃やす決意をする。

　焼却炉に運んでいたら、ハガネがやって来て、強引に持っていってしまう。

「記録を捨てることは科学への冒涜。見過ごせない。俺にくれ」

　抵抗する元気は、カエデには残ってなかった。

17、初盆

　母オモトの初盆の朝、玄関チャイムが激しく鳴る。

　扉を開けるとヘチマとキウイが立っている。

　ヘチマが怒ったように言う。

「もう夏だぞ。お盆だ」

　たたみかけるようにキウイが怒鳴る。

「カエデさんが炊かないなら今年はめし抜きだ。本気だぞ！」

　カエデは激しく首を横に振り、泣き出した。

　真剣な眼差しでヘチマが訴える。

「オモトさんの初盆に、うまい飯を食わせてやりなよ」

　うんうんとうなずき、キウイが賛同する。

「カエデさんならできるよ。迷惑とか考えるな！」

　カエデは二人を交互に見た。

「本当にできると思う？」

　パシッ。ヘチマがカエデの肩を叩く。

「４０年以上炊いてるんだ。できるさ」

　パシッ。キウイも真似をする。

「自分を信じて！」

　うなずき、カエデは涙をぬぐう。

18、レシピ

　４ヶ月ぶりに調理場に入る。

　机の上に計量器が並んでいる。

(せっかくだから、感覚で炊いてみようか)

　カエデは悩む。

　そしてオモトが生きてる間に試さなかったことを悔やみ、記録してもなにも分からなかった失望感で動けなくなる。
　うずくまって泣いていると、人が入ってくる。ハガネだった。

　カエデに紙切れを差し出す。

「やるよ」

　オモトのめしのレシピだった。

「ノートを分析してくれたの？」

　うなずく。

「オモトさんのめしの特徴は、こがさないこと。でも水分は抜けきらせること。今日の気温と湿度ならそのやり方で行けるはず」
　立ち上がるカエデ。

共同墓地には、石の祠がある。

手前に茶碗に山盛りのめしと味噌汁が備えられてる。

村人が集まって手を合わせている。

音楽が始まる。

葬儀歌手のリードでみんな歌う。

「WOW WOW WOW」

(フレーズにあわせて、思い出がよみがえる)

(うまいごはんを、お母さんの味を、死ぬ前に食べさせたかったよ)

カエデが空を見上げると雲ひとつない青空。母オモトの笑顔を思い出す。

19、めしの味

　葬儀を終えて、村人が給食室に集まる。

　ヘチマとキウイに、ハガネもいる。

　カエデはそっと涙をぬぐう。

　ヘチマが食べる。

　驚く。

　キウイも食べる。

　驚く。

　手を取り合って喜んでる。

　カエデの方に駆け寄る二人。

　相変わらず同時に言う。

「食べてみな」

　カエデはためらう。

(母オモトの味ではなかったら？)

「でも」

　背中をパンパン叩いてくる。

　一口食べる。

「お母さんの味だ」

　喜びの涙が流れる。

　ハガネが食べる。

「うまい！」

　カエデがにっこり笑う。

　ヘチマが突っ込む。

「おまえ、昔まずいけなしたくせに」

「そうだっけ。おぼえてない」

　懐かしくて、カエデは思わず笑い出す。

20、ヒナギク

　カエデは６１歳になった。

　４月のある日、給食室でめしが炊けるのを待つ間、ヘチマとキウイがカエデにねぎらいの声をかける。
　ヘチマがいつも通り先に口を開く。

「カエデさん、現役引退おめでとう。お疲れさま」

　キウイが嬉しいことをいってくれる。

「１０年もオモトさんの味を食わせてくれてありがとう」

　カエデはニコニコ聞いている。

　そしてやっぱり昔の話が始まる。ヘチマが、蒸し返す。

「ドキドキハラハラのカエデ飯が懐かしいよ」

　そこへ、初めて一人で炊いた７歳の少女ヒナギクが、羽釜を運んでくる。

　一口食べる。

　芯がある。

　顔を見合わせる。

　みんな懐かしい。

　泣きそうなヒナギクに、カエデが話しかける。

「とっておきのレシピをおしえてあげましょうか？」

　ヒナギクの顔が明るくなり、にっこりとうなずく。

(これで母は、かまどのめしのなかで永遠に生きていける！)

　カエデは微笑み返した。

ナパン「かまどのめし」三稿02　20240524

著　　ELYE

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社